母の心

千代子

五十何番一部への當り籤お試驗もまづ無事
いよ〳〵私の手を離れてたとへ暫くの間にもせよ皆樣方のお仲間には入ることが出來るかしらん、たまには泣きもするだらふ。うれしくもあり　心配でもある。

毎日の送り迎へも出來る限り自分にしてやり度いと片道四五十分はかゝる電車で通ふ子供の爲め早起きになつた私を見て皆の者はおかしと笑ふ。

「童の組おかへり――」

と、お庭のあちこち小さな友を呼びあふ可愛い聲がだん〳〵消えて、やがて、今度は廊下にコツコツと小さい足音を立てゝ先生と御一處にぞろぞろと小さい顏が見える。先生がお呼びになるのももどかしさうに顏を少しホテラセて私の方を見て居る、エプロンのポケットを何か大切さうに兩方の手でおさへて居る樣子。

やがて先生がお呼びになつた、サヨウナラはもう後で、飛んで居る鐵砲玉の樣にかけて來た。

「ママ……　今日はネ、先生と本校へ行つたの、それは面白いことして遊んだの、こんなにお花の種も取つて來たの」

「マアよかつたのネ　何のお種？」

「ペンペン草の……」

「これ蒔くと來年ペンペン草生へるでせう？」

「とても可愛いゝお花よ。そしてお花が落ちてあとに、フエヤリーのペンペンが出來るの、お家へ歸つてこれ蒔きませうネ。」

お庭の花壇へペンペン草の生へる來年を思ふて私は一人おかしくなる。

「オヤ今幼稚園のお歸り？　坊ちやんはもう××小學校のお試驗およろしかつたとうかゞいましたのにまだそんなに御熱心に幼稚園へお通ひになりますの」とこの間ある奥樣は仰られた。私は一寸返事にまごついた。やがては此子等にも　何とか地獄の風とやらつめたい風も吹かふもの、今暫くの間だけゆるされて居る此生活、私は一日も縮めさせ度くはない氣がする。

＊　＊　＊
＊　＊　＊

親心

あゝ立たひとり立たることし哉　貞德

袴着や子の草履とる親心　子堂

花といへも一ついへやちいさい子　羅香

涼風の吹く木へ縛る我子かな　一茶

鹿の親笹吹く風にもとりけり　一茶

子をかくす藪の廻りや鳴雲雀　一茶